インタビュー

誰も見捨てない

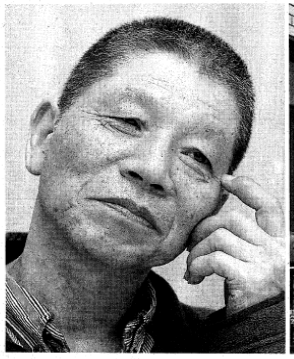
オピニオン

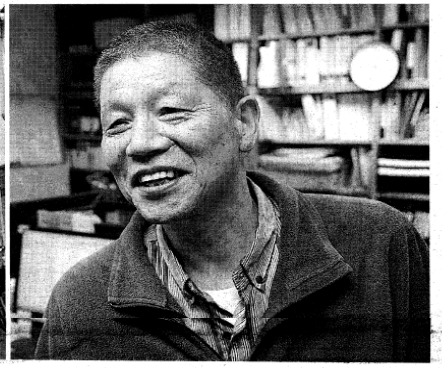
福祉施設さえ拒む ホームレスら支援 凍った心を溶かす

生活保護の受給後 見守る仕組み必要 社会復帰は活力に

NPO自立支援センターふるさとの会前理事長 水田恵（みずためぐむ）さん

47年兵庫県生まれ。90年「ふるさとの会」を設立。現在は同会の顧問や、更生保護法人「同歩会」理事長を務める。





「人との関係では贅沢を味わってきたと思います」
＝東京・山谷、麻生健撮影

路上生活者の社会復帰を阻むのは貧困だけではない。心身に問題を抱え、人間関係をつくれず、福祉施設からさえ受け入れを拒まれる人も少なくない。東京・山谷の労働者支援を原点とするNPO「ふるさとの会」はそうした「見捨てられた人々」の支援を積極的に進めてきた。前理事長の水田恵さんに、実践を通じて培った支援論を聞いた。

――年を取り、働くのも難しく、家族も家もない。そんな人々にどんな支援をしているのですか。

「住む家の保証と『生活支援』です。路上生活者が生活保護を受給しても、保証人がいなければ家も借りられない。一人暮らしできる人には、私たちが保証人になって民間の住宅を借りる。24時間の支援が必要な人々は、私たちが運営する共同住宅に住んでもらう。その上で、両方の方々の日常生活をサポートしています。現在、東京都内で1200人近い利用者がいます」

「路上生活が長かった人々の中には、低所得で単身者で介護が必要な上に、認知症や統合失調症、発達障害など心の問題も抱えるという『四重苦』の人が少なくない。経済観念の乏しい人も多い。介護や医療サービスだけではなく、日常生活を送るための支援がどうしても必要です」

――ほかの福祉施設が引き受けたがらない人々も、積極的に受け入れているそうですね。

「施設が受け入れをためらいがちなのは、暴れたり、重い前科があったり、対人関係に問題があったりする人です。そういう方々はうちで支援するから連絡して欲しい、とお願いしています」

――そういう人々がいることで、他の利用者が迷惑しませんか。

「トラブルだらけです。でも、人に迷惑をかけずに生きられる人は、すでに誰かが支えている。迷惑をかける人にこそ、福祉が必要です」

■ ■

――理念としては正しいでしょうが、現実は甘くないのでは？

「甘くない現実に立ち向かうため、具体的な支援のノウハウを培ってきました。基本方針は、問題行動を抑制しないことです。理解できない行動をする人もいる。やめさせようとするとパニックになる。だから放っておく。そのうちに周囲の利用者も気にしなくなり、収まる所に収まる。『風景化』と呼んでいます」

「私たちにとっては問題行動でも、本人にとっては心の安定を保つ重要な儀式かもしれない。約270人いる職員には、自分の常識や価値観をいったん脇において、相手にとって世界がどう見えているのか、常に考えて欲しいと言っています。赤ちゃんが泣いたら、おしめがぬれているのか、お乳が欲しいのか、誰でも考えるでしょう。それと同じで、人間関係の基本的な作法です」

――でも、さすがに暴力行為は止めさせるべきではないでしょう。

「暴れたら、『抱き合いゲンカ』というのをやります。これは私が山谷の労働者と長年付き合って、自然に身につけた方法です」

――ケンカ、ですか。

「飲んで暴れる人や、発作的に自殺しようとする人を『だいじょうぶやからな』と言いながら、時にはグロにまみれつつ、ずっと抱きかかえ続けていた。私もさびしい時、悲しい時に山谷の仲間に慰めてもらった。だから相手がつらい時には付き合おう、と。一見、ケンカのようですが、そうしていると相手の気持ちも次第に収まってくるんです」

「先日も若い職員が、酔っぱらって大家に怒鳴り込もうとした利用者と一晩中、『抱き合いゲンカ』をしていました。酔いがさめると利用者は何度も『ごめんなさい』と職員に頭を下げた。とことん付き合うことが信頼につながる」

■ ■

――暴力までいかなくても、利用者間のトラブルは絶えないのでは？

「おっしゃるとおり、共同生活はケンカから始まる。そこで職員を交え、利用者同士のミーティングをしょっちゅうやる。『オレがオレが』と言うばかりで、相手のことを考えない意識から脱するのが狙いです」

「私たちの共同生活では『家でも外でも決して酒を飲まない』というルールがあります。でも、飲んで帰ってくるおっさんは必ずいる。なぜ、飲んだのか。本人は『病院に行く時、職員が同行してくれなかったから』と言い訳をする。勝手な言い分ですが、みんなで真剣に話し合い『通院に付き添えるよう、職員の仕事をみんなで分担しよう』という新しいルールを決めた。すると本人も『みんな、オレのことを考えてくれているのか』とひそかに思う」

「それでも、また飲んでしまう。再度のミーティングで本人は『オレはもう、ここにはいられないかな』と反省し、過去に飲んでどんな迷惑を周囲にかけてきたか、ゆっくりと語り始める。他の利用者も『あの時、女房に手を上げなければ』『仕事から逃げ出さなければ』など、痛切な悔恨を抱えて生きています。失敗を繰り返し、話し合うほどに仲間意識が強まり、食事や排泄などお互いの世話を気軽にやるようになる」

――職員が世話するのではなく、利用者同士で支え合うのですか。

「それが『生活支援』の基本です。集団の中で自然に役割分担ができ、お互いの役割を認め合う。そこで誇りや自尊感情が出てくる。居場所ができるんです。一方的なサービスよりも、人間関係づくりのサポートが職員の主な仕事です」

「うちの利用者たちは、時として頑なです。高度成長期、都会で働けば家の一軒も持てると思って故郷を出たが、働いても働いても貧乏で家族もできず、働く場所からも抜け出せない。年と共に働くことも難しく、食えなくなる。周囲が全部不信だらけの世界になって、自分で自分を律するのも馬鹿馬鹿しくなる」

「でもね、そういう面倒くさい人ほど、実は豊かな人間性を持っている。関係を回復し、凍っていた心が溶けた時、その人の内実があふれ出す。私には利用者の姿が『フーテンの寅さん』と重なることがある。ただし、寅さんを支えてくれる妹のさくらはいない。さびしい寅さんたちです。彼らをみとるまでおつきあいするのが、私たちの仕事です」

――なぜ、そこまで彼らの支援にこだわるのですか。

「私も山谷にはまっているからですよ。1970年ごろ、学生運動をしていて山谷で餓死者が出たという記事を読み、がくぜんとした。それから山谷の現場闘争に関わり、そこに住んで日雇い仕事をしながらずっと支援を続けてきた。山谷から離れたことはない。人間関係にほっとできたんでしょう。私は誰かに頼り、弱音を吐きながらでないと生きていけない。ここが居場所なんです」

「ふるさとの会はすでに私の手を離れつつあります。実際の支援活動はほとんど職員がしていますが、支援のやり方は私よりも柔軟で信頼できる。ただし、NPOとしての経営には不安定な面が残っています」

■ ■

――生活保護受給者を劣悪な環境の宿泊施設に囲い込み、保護費を吸い上げる「貧困ビジネス」が問題になっています。「ふるさとの会」が運営する共同住宅も、広さなど十分とは言えない面もある。貧困ビジネスと批判されかねないのでは？

「うちの運営費は、生活保護の住宅扶助費と実際の家賃との差額から工面しています。収支構造だけ見れば、貧困ビジネスと言われているものと変わらない。だけど、その中の葛藤を見てほしい。90年代、山谷の労働者が高齢化しホームレスになってしまい、生活保護の受給を勧めようとした時、まずは住む場所を確保しなければどうしようもなかった」

「生活支援もそうです。せっかく受け取った保護費を酒や女で使い果たしてしまう。たしなめると『何が悪い。オレのカネだ！』と。『おまえのカネやない。税金や。みんながおまえを支援している証しや』と何度も説明しました。生活保護のアフターケアをしないと、税金は無駄になるし、生活も荒れてしまう。誰もやらないなら、私たち民間でやるしかない。ボランティアでやるのも限界がある。となれば、保護費の一部を運営費に充てざるを得ない」

「確かに悪い業者もいるが、保護費が収入源の事業すべてを『貧困ビジネス』とレッテル貼りするのは乱暴です。もっと議論をして生活支援を制度化し、公費も入れて支えれば、問題は解決します」

――生活保護制度への世間の風当たりは強い。さらなる税負担に社会的な合意が得られるでしょうか。

「ホームレスのままだと地域にとっては迷惑なだけでしょうけど、生活保護と生活支援を受けつつ、定住して社会生活を営むようになれば、その人たちの使うお金や家賃が地元を潤す。地域経済にとっても、治安の面でも、メリットは大きい」

「さらに大事なのは、人間の共同性です。路上で倒れているホームレスの人を無視して通り過ぎた時、自分の中に残る後味の悪さといったらない。困っている人には思わず手を差し伸べるのが自然でしょう。この街には生活保護に支えられ生きている人がいる、ということがメンタルな面でも人々を豊かにする。自分のことばかり考える社会のほうが異常です。それを少しずつ変えていくのが私たちの仕事だと思っています」

（聞き手・太田啓之、浜田陽太郎）